哲學研究　第六十六號　第六卷　第九册

眞善美の合一點

西田幾多郎

絶對意志或は絶對我の立場に於ては、萬物すべて精神的內容の表現となる。アッシシのフランシスが有名なる太陽讃歌に於て

Soyez loué, Seigneur, avec toutes vos créatures
spécialement monseigneur frère soleil
qui donne le jour et par lui vous montrez votre lumière.
Il est beau et rayonnant avec grande splendeur,
de vous, Très-Haut, il est symbole.

……（サバチーによる）

と歌うた時、日も月も星も風も雲もなべて神の象徵ならざるものはない。更に此立

場に徹底すれば、肇法師の所謂天地與我同根、萬物與我一體にして、上に菩提の求むべきものなく、下に生死の脱すべきものもなしとも云ひ得るであらう。併しかゝる立場は單なる無反省の立場でもなく、又無意識の立場でもない。天眞爛漫嬰兒の如くにして天國に入るを得るならんも、嬰兒の精神狀態が直に宗教的精神狀態ではない。天國に入るものは一たび自我の根柢に到達せなければならぬ。到得歸來無別事からんも千般思を碎かざりし前の廬山煙雨浙江潮とは同一でない。

自己の根柢に到達するとは何を意味するか。自己とは此場合如何なるものであるか。自己が自己を對象として省みる、省みる自己と省みられる自己と同一である、かゝる自己は單なる知的作用と考へられるかも知らぬが、その本質に於ては純粹行爲 Handlung schlechthin でなければならぬ、純粹意志でなければならぬ。フィヒテの云ふ如く自覺に於て知るといふことは働くことでなければならぬ。此立場に於て萬物は自我の表現として見られるのである。ファウストの如く「大宇宙の符號」をからずとも、我々は此立場に於て「地の精」Erdgeist と話すことができる。併し自己の中に自己を寫すといふことは、自ら作用の無限なる連續を意味するが故に、我々の認識對象界は何處までも不完全である、知識は何處までも未完成である、知識の未完成は知識其

者の本質である。此の如き作用の無限なる連續卽ち自己の無限なる作用は現在の自己に對して、無限の實在界として外に射影せられるのであるが、斯く相反する兩方向の統一其者が眞の自我であつて、我が此の如き矛盾の統一を自覺するとき、無限なる外界を我の中に取り入れることができる、卽ち知識我より實踐我に轉ずるのである。普通に自覺は概念的知識であるかのように思はれるかも知らぬが、我々は判斷の對象として自己を知ることはできぬ、自覺は判斷の內容となることのできない、却つて判斷の根柢となる直觀である。私が自己の根柢に到達するといふのは此立場に到ることを意味するのである。此に到つて我々は意識一般の立場をも超越して之を內に含むことができるのである。すべて意識現象は如何なるものであつても、本質的には此立場の上に立つと考へることができる。表現的立場の上に於てのみ意識現象が成立すると考へることができるのである。單なる感覺や知覺の如きものに於ても、それ相當の領分を表現化して居るのである。色や音や形などが主觀の所變と見られるは之によるのである。此點に於ては實在界が理性の所作と考へられるのと同樣である。我々が自己の身體といふものを考へる時、既に客觀の表現化を始めるのであるが、意識現象に至つては唯心論者の考へる如く外界を自己の所變

と見ることができるのである。唯此の如き表現的立場に於て我々は無限の進行を認めねばならぬ、此進路の上に於ても、我々は何時も無限なる課題の前に立つのである。此の如き無限なる進行の行先が現在の立場に於て包容し盡されなかつた時、物の世界に對立して意識現象なるものが考へられるのであるが、進行の行先が自己の內に取り入れられた時、藝術的立場となる。前の場合では、我は身體を中立として無限大の物體界と結合して居ると考へられるが、後の場合では、無限が內に含まれるのである。ベルグソンは意識とは動作に對する表象の過剩であるといふて居るが、所謂意識現象の本質を示すものとして可ならんも、意識の底には動作によつて塞ぐことのできない意識がある。藝術家の直觀の如きは動作によつて益深くなり明となる。思想が表象や言語によつて發展する如く、藝術的直觀は動作によつて發展するのである。動作其者が意識となるのである。

藝術的立場の上に立つとき、我々は既に意識一般の立場、認識の立場を超越して、而も之を內に含む自由我の立場に立つのである。客觀はすべて人格的內容の表現となる。藝術的作用の立場は單なる本能の立場ではない。此處には全然立場の轉換があると考へなければならぬ。それでは既に客觀を自己の所變と見る表現的立場

の上に立ちながら、更に無限の對立を認め、無限の進行を認めるとは何を意味するか、換言すれば藝術的意識の立場に對し道德的意識の立場は何を意味を有するか。藝術的立場に立つて見る時、落つる石も流れる水も、盡く精神的內容の表現ならざるものはない。併し我々は石其者水其者は無意識と考へる。之に反し我々の身體は一方に於て藝術的立場から精神內容の表現と見られると共に、一方に於て身體は直に精神作用の機關と考へられる、身體によつて我々の精神內容が働くのである、精神內容が現實となるのである。更に藝術家の創造作用に於ては、人格的內容自身が直に身體の動作となり、自己自身を自覺し、自己自身の世界に入るのである。身體は物質界に於ける種々の世界の結合點である。我々が藝術的直觀の立場に於て自然を見る時、自然の背後に見る精神は直に自己の精神である。花に對し月に對し之を詩化する時、我々は之を個性化するのである、之を自己と爲すのである。以太利の夏の夕べ、螢のむらがれる生垣の間にさまよひつゝ、雲雀の聲に感興を得たと云はれるシェレーの名高き「雲雀」の詩は雲雀といふ鳥の性質を言び表はしたものではない、シェレー自身の感興に外ならない。而もかゝる感興こそシェレー自身の本體であり、かねて深き自然の本質である。眞實在は一般的概念の內容の如きものではなくして情意的な

特殊的內容でなければならぬ。シェーレー自身は單に此の如き自己の機關に過ぎない、シェレー自身の眞の自覺は此の如き創作に深く入込むことである。

詩人の感興、詩人の動作、詩人の意識、此等のものは如何なる關係に於て立つか。藝術的內容が創作的作用として現れる時、判斷的意識を通らないで、感興より直に動作に移ると考へることができる。フィードレルの云ふ如く、繪畫の如ぎ場合に於ては純粹視覺から直に表現運動に移ると考へ得るであらう。純粹視覺の內容といふのは所謂知覺の內容ではなくして、人格的內容である。詩人の場合に於ては、その表現手段が言語であるから、概念的知識に近い樣に思はれるのであるが、詩人に於ては言語はその表現手段に過ぎない。縱、文學書の中に科學的議論が挾まれるとしても、それは科學としてではなく表現手段としてゞなければならぬ。言語は詩人に於て、色や音の畫家や音樂者に於けると擇ぶ所はない。唯、詩人に於ては概念的意識の背後に含まれ居る自由なる人格的內容をも表現し得るのである。右の如き藝術的內容がシェレーの「雲雀」の詩に於ての樣に、自然に對する感興の場合には、それが自然に對する詩人の主觀的感情であつて全然非實在的と考へられる。何となれば、それは主觀に對する當爲でもなければ、自然に對する概念的眞理でもないからである。之に反し藝

術的想像の內容が人間であつた場合、前の場合と異なり、藝術的內容其者が直に道德的內容と關係を有つと考へることもできる。勿論藝術的立場と道德的立場と峻別すべきことは言ふまでもない。藝術的態度に於ては、自然を描くのも、人間を描くのも同一と考へ得るであらう。併し人間其者を直に藝術的對象とした時、その內容は藝術的たると共に直に自己に於て實現し得べき可能性を有することを拒むことはできまい、自己によつて直に所謂實在界と結合し得るのである。而して斯く人間を對象とする藝術內的容が直に實在化することができると云ふのは私はその藝術的內容の中に知識其者を含むが故であると考へる。知識要素を含むといふのは、心理學者の云ふ如き意味に於て感情の要素としてではなく、眞理として含むのである。人間を對象とする藝術的內容は同時に人間其者の知識である。自然に對する詩人の感想は自然其物の知識ではないが、人間に關する詩人の感想は人間其物の深い知識でなければならぬ主觀的たると共に客觀的でなければならぬ。斯く主客合一であるから實現的であるのである。藝術的立場に於ては意識一般の立場を超越し且つ之を含むと云ふことは人を對象とする藝術內容に於て最も之を明にすることができる。自然に對する詩人の描寫も單に自然の客觀的描寫ではなく詩人の人格の

反映でなければならぬが、人間の詩的描寫に於て人格的內容が自覺的となると考へることができる。我々の人格が深く自己自身の中を照して自己自身を知るといふことができる、行爲が行爲自身を自覺するのである。我々は意識一般の立場を內に取り入れることによつて、卽ち理性を內に含むことによつて、人格的內容が成立ち、此內容が右の如き場合に於て、始めて積極的に自己自身を知るのである。

藝術家が自然の描寫から人間の描寫に移る時、私はその內容が實在界と接觸して實行的可能となると云つた。無論詩人がその感興から實行に移る時、既に詩人の立場を失ふのである。此處には大なる立場の變更があると考へねばならぬ。詩は何處までも實在を離れたものである、抒情詩が詩の中の詩と考へられるも之に由るのである。併し元來自由意志の立場に立つ人格的內容は行爲に至つて己自身に還るのである。詩人の人格を離れて詩といふものもない。自然に對する藝術的感情の內容は知識を含まないが、人間に對する藝術的感情の內容は知識其者を含むのである。無論前者の內容も既に人格的であり、後者の內容も藝術的內容としては非實在的でなければならぬのであるが、大なる藝術に於ては深き人性の眞理を含むと考へざるを得ない、眞なる故に美であると云ふことができるのである。それは心理學的眞

理とか社會學的眞理とかいふ如きものではなく、又何等實踐的意味を含まないのは云ふまでもない。併し人間が人間を描寫する所に、何等かの意味に於て知識の性質がなければならぬ、少くとも客觀的意義がなければならぬ。ショーペンハウエルは意志が自己を照すことによつて自己自身を解脱するといふが、かゝる直觀は最深い意味に於て自己自身の知識でなければならぬ。人間に對する藝術的內容が自然に對するそれと異つて、一面に於てそれ自身が知識と考へられるのは、概念的實在其者の藝術的感情なるが故である。我々は思惟の對象として知覺的經驗の背後に自然科學的實在を考へるのであるが、かゝる實在は人格的感情の十全なる對象となることはできぬ。是故に概念的自然に對する感情は實利的感情に過ぎない、自然科學的世界は唯純なる知識の創造として知的感情に十全であるのみである。之に反し我々の自己は一面に於て思惟の對象たると共に、一面に於て直覺の對象である。自我に於ては思惟と直覺とが一である、自我に於て我々は概念的實在其者に對して直に藝術的感情を有つことができるのである。作用の無限連續たる自我に於ては知識と感情とは合一するのである、一つの物の兩面となるのである。純なる作用は一面に於て知であり、一面に於て情である、知ることは感ずることであり、感ずることは知ることであり又

働くことである。

眞實在は作用の無限なる內面的連續である、我々が實在に對して感ずる無限の大さ、無限の深さは自己自身の深さの射影に過ぎない。果なき蒼空に對する畏敬の念は無限なる空間に對する畏敬の念であり、空間の無限に對する畏敬の念は自己の中に自己を寫す自覺作用に對する不可思議の感に外ならない。我々の知識は無限に自己の中に進むのである、此方向に於て我々は無限なる客觀的實在を見る。心理學者が運動の衝動を以て意識が始まるといふ如く、我々の意識の始は無限の不安と考へ得るであらう。此の如き無限なる衝動的意識から知識が發達するのである。併し何處まで知識が發達しても、我々は我々の背後に從ふ衝動的意識を脫することはできぬ、我々は自己の意志を知識化し終ることはできぬ。たとひ自由意志の意識は知的發展の結果として現れ來るとしても、意識の始に於て既に此立場が含まれて居るのである。衝動の意識といふのも此立場に於て成立し、此立場に於て分化發展するのである。此立場に於て我々は自己の中に無限の深さを望む時、その進展の方向に於て無限なる客觀的對象を望むと共に、之を自己の中に省みる方向に於て無限なる精神作用を見る、而して又此の如き相反せる兩方向の結合點たる具體的自己其

者の方向に於て、無限に深く無限に自由なる藝術の世界、哲學の世界、宗教の世界を有つのである。反省せられたる自己に對しては客觀界は自己の手段と見られるが、具體的自己の立場に於ては客觀界は自己の表現となる、而して此の如き自我の方向に於て無限の進行があると考へねばならぬ其他の無限は此無限の反映に過ぎない。

ショーペンハウエルならねど、私は音樂の如きものに於て無限に深い內面的自己其者の純なる表現を見ることができると思ふ。音樂に於ては概念的判斷は全然その權威を失ひ、唯純なる生命の活動あるのみである。抒情詩の如きものも音樂と似通ふ所はあるが、抒情詩に至ては音樂に比して知識內容其者を權威を有すると考へることができる。リッツマンが「グーテの抒情詩」の始に於て den unmittelbarsten, subjektivsten Gefühlen und Stimmungen des menschlichen Seelenlebens künstlerischen Ausdruck zu geben in einer dem Inhalt sich anschmiegenden, den Inhaltsgedanken begleitenden, aber nie übertönenden, rhythmischen Form. と云つて居るのは能く抒情詩の本質を言表して居ると思ふ。內容に伴ひ而も之を越えざる律動的形式といふ點に於て音樂と抒情詩との明なる區別があるのである。更に戲曲の如きに至つては客觀的知識內容其者が要素としてそれ自身の權威を保たねばならぬ。戲曲に於ては性格と境遇と相對し、行爲がその中心となる

のである。自然は抒情詩の內容となり得るが、戲曲の內容となることはできぬ。無論哲學的世界觀と悲劇とを直に同一視すべからざるは言ふまでもないが、希臘の悲劇作者が悲劇によつて人生問題を解決しやうとしたといふのは偶然ではない。音樂の如きものも固より人格的內容を表現するものであるが、秋毫の知的內容の挿入も音樂の美を破ると考へなければならぬ。音樂は純粹に感覺的でなければならぬ、此處に音樂の長所もあれば短所もあるのである。自然科學的現象界に於ける感覺の如き位置を音樂は文化現象の世界に於て取ると考へることができる。意識一般は感覺を材料として自然科學的世界を構成すると共に、音樂によつて表現せられる如き人格的內容を材料として文化現象の世界を構成するのである。此の場合、意識一般といふのは作用が作用自身を省みる無限の方向を示すに過ぎない。コーエンは感覺が「知覺豫料の原理」に當嵌つて經驗界に於て客觀性を得ると云ふが、此の如き客觀的經驗界はもはや理性に意志を加へた立場に於て成立するのである。理性に意志を加へるとは、理性に對して外から他のものが加はるのでなく、自我が自我の具體的根元に還り行くことである。私が手を動かす時、それは心理學者のいふ如き單に筋覺關節覺等の結合でもなく、又點から點への無限なる位置の結合でもない、一直

線として、分析によつて達することのできない無限の連續であり、私の手の運動として、內容と連續とは不可分離の關係を有し、一つの筋力の發展である、否一つの力感の自覺である。無限なる內面的連續は筋覺其者の精神に外ならない。「知覺豫料」の原理は此の如き純なる作用の立場に於て成立するのである。純なる力の自覺によつて成立するのである。併し我々の自我は單なる力ではなくして無限なる力の統一である。我々の手の運動の背後に無限なる人格のリズムを見ることができる、無限に深い生命の流を自覺することができる。此考を深くすれば我々は動作は一々神の舞蹈とも考へることができる。それで我に對して與へられたものは我によつて求められたものであり、感覺として與へられたものゝ中に知識我の無限なる發展を含むと考へ得るならば、音樂の如き藝術的內容の中に自由我の無限なる發展を含むと考へ得るであらう。

抒情詩や音樂の中に包まれたる人格的內容はその自己自身を發展するに從つて實現的となる、卽ち自ら働くものとなる。何となれば主觀を超越し而も之を中に含むが故である。主觀は特殊化の作用であり、實現の原理である、特殊なればなる程、實在的となる、人格的內容が自由と云はれるのは之に由るのである。數學的思惟の如

きものは、その立場に純なれば純なる程、その內容が客觀的眞理として純化せられるのであるが、一方から見れば、此方向に發展することは、却つて實在から遠ざかり行くと考へることができる。經驗的と考へられる物理的知識の如きものでも同樣である。此の如き無限なる發展の方向を意識一般への方向卽ち超越的主觀への方向として考へるならば、數學の如き純知識的內容に於ては此方向に進むに從つて具體的となり、現實在から離れ、人格的內容に於ては之に反し此方向に進むに從つて具體的となり、現實的となると考へることができる。人格的立場といふのは無限なる發展的方向の統一である。自己が自己の中に向つて進むことによつて、すべての發展を包むことができる。他に於ては意識一般の立場に向ふことによつて一方に於て客觀的となると共に一方に於て却つて主觀的となると考へられるが、人格的內容に於ては發展すればする程、すべての方面に於て客觀的となる。すべての方面に於て客觀的となるといふことは自己が自由となり創造的となることである、卽ち絕對に能働的となることである。實在界は意識一般によつて成立するとすれば意識一般を成立せしめるものは自由我でなければならぬ。

人格的內容は自己自身の中に入込めば込む程、動的となる、卽ち自己に對して立つものが自己の作用の中に入り來るのである、物が我の働きの中に溶かされるのである、換言すれば進めば進む程働くものなき働きに入る、卽ち知識の世界から純なる意志の世界に入るのである。感覺的藝術に於ても既に此途に入るものであるが、此方向に徹底するには思惟の對象界たる所謂客觀的實在界をも自己の作用の中に溶し込まねばならぬ。カントの云ふ如く自己が自然の立法者となるのみならず、自己が客觀的實在界の創造者とならねばならぬ。如何にして自己が客觀的實在界を創造し得るか。我々は此處に於て藝術の立場から道德の立場に入らねばならぬ、自由意志の立場に入らねばならぬ。無論自然界に於て我々は一原子・一分子すら創造し得ないであらう。併し所謂自然界は眞の實在界ではない、自然界の底に歷史の世界がある、我々は此世界に於て創造的である。道德的自我が自然界よりも深いそれ自身の內容を有し、それ自身の世界を有たぬとするならば、意志の自由とは單に撰擇の自由といふの外ないであらう。併しかゝる考は自然を唯一の實在界と考へるによるのである。認識對象界は規範意識の上に立つといふが、規範意識は道德的意識の一面である、自由我の自覺なくして規範意識はあり得ないのである。我々が或判斷に

對し、それが眞であるとか僞であるとかいふ時、我々は單なる知識の對象界から既に意志の世界に入つて居る、合目的的世界に入つて居るのである。リップスの「對象の要求」といふのも此の種の意識と解することができる。その對象と考へられるものが非人格的なる時、我々は外に知識の世界を見るが、對象其者が人格的なる時、對象の要求と自己の作用とが合一すると考へることができる。此時、物は我の中に溶かされて、すべてが內に重なる作用の無限の層となる。物の世界といふのも人格的作用の一たる思惟の對象に過ぎないからである。廣き景色をレンズの中に收めやうとする寫眞師は後に退く如く、我々は無限に自己の中に入り込むことによつて物の世界をも自己の作用の中に收め得るのである。意識一般の立場を自己の中に取入られて、規範意識となる樣に、論理的當爲の根柢に倫理的當爲がなければならぬ、對象間の關係を定むる規範の基には作用と作用とを統一する規範がなければならぬ。矛盾律の根柢には道德律がある、矛盾律は道德律の射影である。論理の規範に從ふことは對象の義務であり、我々が義務に從ふことは、作用と作用との矛盾律に從ふことである。フィヒテが「知識學」の始に於て云つて居る如く、論理的自同律の根柢には、直接の事實として „Ich bin Ich" といふ自己同一の意識がなければならぬ。而して自己同

一意識の積極的內容は無限の自敬であり、無限の自愛である。限りなき深き自己の根柢に向ふ所に、そこに無限なる自敬の念が起り、無限の行先が行く者の中に外ならざる時、そこに無限の自愛が起るのである。我々が論理的規範意識の上に立つて何處までも矛盾を避け眞理に徹底せうとするのは、直に我々の自我に對する深き自敬の念である、深い自敬の念を離れて眞摯なる眞理の探求はあり得ない。「汝の行爲の格率が一般の法則となるが如く行へ」とか「自己及び他人の人格を目的其者として用ゐよ」とか云ふも、如何なる行爲に於て汝は汝自身の人格を目的其者として用ゐ得るか、汝の行爲が一般的法則となり得るか。自分の食卓の一椀を除き、自分の重ね居る一枚の衣を脱いで餓寒に惱める人に與へるのは、他人の人格を目的其者として見るのであらう、かゝる行爲は一般の法則ともなり得ると云ふことができるであらう。併し他人の物質欲を滿足せしむることは精神的要求を滿足せしむることではない、他人の生物的生命を救ふことは直にその靈的生命を救ふことではない。道德律が單なる思想から實現に入るには、何等かの內容を取らねばならぬ。無論カントの云ふ如く意志が何等かの內容を取る時、それは絕對的善意志といふことはできぬかと云ひ得るであらう。縱それが眞理を欲する意志であつても又美を求める意志であつ

ても無條件に善意と稱することはできぬ。併しカントが虚僞の約束が義務に背くや否を知らうと思はば、それが一般の法則となり得るかを考へて見よと云ふ時、我々をして虚僞の約束が一般の法則となることはできぬと考へしめるものは何であるか。功利主義からしても斯く考へ得るであらうが、カントの立場に於ては秋毫も利害得失の念を混ずべからざるは言ふまでもない、我々は純眞に法を敬する念よりして斯く考へねばならぬ。然らば如何にして我々は全然利害得失の念を離れて純眞に法の爲に法を敬し、法を敬するの念よりして働くことができるか。唯人間のみ法を理解して之に從ふことのできる理性者なるが故にと、カントは云つて居る。併し法の成立するには何等か法の内容がなければならぬ、何等の内容もない法則といふものはあり得ない。我々は如何なる内容の法則を敬し、如何なる内容の法則によつて行ふべきであるか。カントは法則に何等の内容があつてはならぬと云ふ、唯純眞に法を敬するの念より行へといふ。併し我々が法を敬するといふことは、その内容を敬することでなければならぬ。全然無内容なる法則は我々を理解することすら不可能である。無論、法の内容を離れても、單なる法の理解といふものが殘ると考へ得るかも知らぬが、全然、法の内容を離れた法の理解といふものは、色を離れ音を離れ

た視覺作用や聽覺作用といふ如き抽象的一般概念と同樣でなければならぬ。虛僞の約束によつて其の場をのがれるといふ格率が格率自身を破壞するが故に、一般的法則となることができぬといふのは如何なることを意味するか。カントは之を說明して denn nach einem solchem (Gesetz) würde es eigentlich gar kein Versprechen geben, weil es vergeblich wäre, meinen Willen in Ansehung meiner künftigen Handlungen anderen vorzugeben, die diesem Vorgeben doch nicht glauben oder wenn sie übereilterweise täten, mich doch mit gleicher Münze bezahlen würden. と云つて居る。併し斯く虛僞の約束が己自身を破壞すると云ふのは、約束が約束としての目的を達せないと云ふのであるか、將又約束といふ概念自身が論理的矛盾に陷るといふのであるか。約束が約束自身の目的を達し得ないが故にと云ふならば、約束の目的といふものがなければなるまい。而もカントの立場からすれば、道德的法則には如何なる內容をも許すことはできない。それでは如何なる法則であつても概念自己の中に論理的矛盾さへ含まなければ、可なるのであるか。虛僞の約束といふのは、約束でない約束といふことであつて、概念それ自身が論理的矛盾であるかも知らぬが、單にかゝる論理的法則が我々の行爲の規範となるのではあるまい。カントの云ふのも無論單に概念として矛盾するといふのではなく、

之を一般の法則とするといふ條件を入れて考へるのである。併し人々相欺けば約束といふものゝ成立たないのは云ふまでもないが、虛僞の約束が一般的法則となり得るやを決するものは、約束の目的自身にあらざれば、單なる論理的矛盾律あるのみであらう。

我々が全然利害得失の念に煩されることなく、又單に論理的成立不成立といふ如きことを離れて、法なるが故に之を敬し、純眞に法を敬するの念よりして働くことが善と考へられるのは、純眞に法に從ふといふことが、人間の理性の完成であり、理性的人間の目的たるが故でなければならぬ。此意味に於て道德法は積極的意味內容を有するのである。人性の完成といふことが嚴密なる道德的立場に對して他律的と考へられるのは、人性の要求を認識對象の世界に射影して見るが故である。純なる道德的意志が形式的であり無內容でなければならぬといふのは、我々の意識內容を知識內容に限るが故である。併し認識の立場に於ては見ることを見ることはできぬが、見ることを見ることによつて我々は無限なる藝術の對象界を有つ、知識的には聞くことを聞くことはできないが、聞くことを聞くことによつて我々は無限なる音樂の世界を有つ、我々は單なる意志を意志することを得て、我々の前に無限なる歷史

の世界、文化の世界が開かれるのである。斯くして無内容と考へられたカントの定言的命令は無限に豐富なる内容を有つと考へることができる。約束を守るといふが道德的價値を有するのは單にそれが一般的法則となるといふにあるのではなく、義といふものが大なる人性の要求として文化現象を構成する一事相を成すが故である。カントが汝の格率が一般的法則となる如く行へと云ひ、自己及び他人の人格を目的として取扱へといふのは、唯我々の純なる作用の内容を對象化する勿れといふことでなければならぬ。法の内容を敬するのではなく法其者を敬することによつて、我々の自由なる人格の歴史が開かれるのである。倫理の法則は特殊なる内容を肯定するのではなく寧ろ之を否定するのである。自由なる人格の發展に對して自然法の如くに一般的法則といふものはない。約束を守るといふことすら此内容に拘泥するならば、時に自由なる人格の發展を害するのである。右の如き意味に於て我々の論理的要求も倫理的要求の上に立たねばならぬ。知的發展は自由なる人格發展の一面であり、論理的價値意識は倫理的價値意識の一面であるといふことができる。無論眞は直に道德的善ではない、眞理に忠なることゝ道德的義務に忠なることゝは一致せない場合もあるであらう。併し無限なる人生の要求の綜合統一を

離れて抽象的善といふものはない。カントが善を形式的と考へたのは經驗內容の先驗性を認めなかつた故である。知識的良心が道德的良心と相容れない樣に思はれるのは部分的立場に固着するが故である。種々なるアプリオリの上に種々なる眞理が成立するであらうが、具體的眞理は此等の眞理の目的的統一になければならぬ。カントが數學的知識が感覺的內容を得て客觀的知識となると考へた所にも、此意味を見出し得るであらう。

知識と道德との關係についても、種々の場合が考へ得るであらう。我々が何處までも眞理に忠實に進むといふことは、一方に於て忠實なる性格を意味するものである。眞摯なる眞理の探求は深い自敬の念に基かねばならぬ。我々が思想の矛盾を解決しやうと求めるのは直に人格の統一を求めるのである。若しその知識が實踐的內容を有する場合に於ては、單に此の如き間接の關係のみならず、直接の關係を有つとも考へ得るであらう。併し右の如く知識と道德とを離して考へないで、道德の內容といふべきものを考へて見ると、善とは義務の爲の義務としても、如何なるものが眞の義務であらうか。我々に取つて最高の義務と考へ得るものは、それ自身に價値あるものゝ實現といふ外にない、而して眞理の探求の如きはかゝる義務の一と考

へ得るであらう。又斯くの如く知識其者が善であると考へなくとも、知識內容の進歩が自ら我々の人生觀に影響し、人生其者の意義を變ずると考へ得るであらう。知識の中には單に人生の手段としてのみ意義を有すると考へられるものもあるが、科學的知識の如きものであつても、深くなればなる程、直に人生其者に意義を有つ樣になる。科學的知識の根本概念の革新は人生其者に影響なくして止まないであらう、我々の哲學とはかゝる意味の知識である。最初に云つた樣な場合に於ても、一見知識の內容と道德の內容と關係ないようにも考へることができ、我々は如何なる知識の內容に對しても、その探求に忠實であるならば、性格の忠實を失はないと考へられるであらうが、斯く他人から見て兩方の價値が無關係と考へられる場合であつても、當事者自身に於ては無關係であつてはならぬ。若し其人自身が知識の無意義なるを知りながら、尙之を探求するならば、直に其人の道德的性格を破壞する樣になる。其人の行爲が忠實といふ如き倫理的價値を要求し得るには、其人は主觀的にその探求する知識を價値あるものと見て居なければならぬ。道德的價値と知識的價値とを離し得るのは傍觀者の態度であつて當事者自身の態度ではない。行爲の立場に於いては、目的の善が行爲の善でなければならぬ、內容と形式と離すことはできぬ。

他の人からは、形式に於ては善であるが、內容に於ては不善と見られる場合でも、私は直に道德に二樣の標準があるとは云はれまいと思ふ。知識に於ては尙形式と內容とは離して考へ得るでもあらう、內容が誤であつても論理の形式は論理の形式としてそれに禍されないと考へることもできるであらう。併し善意の形式に於いては形式其者が內容の善なることを要求して居るのである。論理の形式は必ずしも內容の眞を要求しないが、道德の形式とは內容の善なることを要求する形式である、目的的統一の形式である。論理的過程は與へられた假定を、假定として進み得るのであるが、善意は己の動機が假定の上に立つことを許さないのである。自己の行爲が絕對的善に合ふことを求めるのが道德的善意である。無論何人も絕對的善を知り得る筈はない、併し此信念の上に立ち之に合ふことを求めるのが善意の善意たる所以である。善意といふ如き形式的善がそれ自身に於て價値を有つと考へられるのも、此意味に於てゞなければならぬ。善意志の內容とすべきものは、他の手段としてゞなく、それ自身に價値を有つものでなければならぬ、純なる價値意識の內容でなければならぬ。我々の人格が目的其者と考へられるのも、かゝる意識の純一なるが故である。斯く考へ得るならば、知識の爲の知識といふ如きものも、善意志の內容の一

つと考へなければならぬ。價値なきものに忠實なることも道德的と考へられるかも知らぬが、忠實の爲の忠實は忠實でない。最高の目的の爲に忠實といふことが忠實をして眞に忠實たらしむるのである。プラグマチストの如く知識を單に手段と考へる人々は何を以て生命の內容となすかを解し難く、さなくとも知識を以て人格と關係なきものゝ樣に考へるのは、模寫說に捉はれ居る人であらう。知識は人格的內容の內面的發展の一つの過程であり、人格の內面的發展を離れて眞の知識と稱すべきものはない。無論、內容の善は直に意志の善ではない、善意志といふのは內容の善の外に何等かの性質を有つて居なければなるまい。併し我々の人格は單に種々なる內容の總和ではない。善意志と眞理との間には、單に善意志が眞理を價値あるものとして之を擇ぶといふ以上の內面的關係なければならぬ。具體的眞理の內容が直に人格的內容であると考へることもできるのである。カントは數學的知識は知識ではなく知覺と結合して始めて眞の知識となると云ひ、又マールブルク學派では知識はその具體的根元に還ることによつて客觀的となると考へられるが、我々に取つて最も具體的根元と考ふべきものは意志の直接の內容たる人格的內容の外にない。知の極は行の立場に至らねばならぬ、最高の眞理は最上の善であると云ふこ

とができる。プラトーが善の理念をすべての理念の上に考へたのも深い意味あることである。言ふまでもなく知識はそれ〴〵の立場に於て眞なるものである。代數は代數の立場に於て眞であり、幾何は幾何の立場に於て眞であり、代數が幾何に應用せられるや否は前者の眞理に何等の關係もないと考へ得るであらう。併し全知識の體系を離れて唯一つの抽象的立場に於て進むといふことは、無意義の遊戯に終る外はない。一種の知識がその立場に於て純化せられ行くといふことは一見全體の統一を離れ行く樣に思はれるが、その知識の本質が明にせられると共に却つて知識體系に於ける統一が明にせられるのである。斯く知識が自律的に統一せられ行くことが具體的根元に還ることであり、知識が客觀的となることである、云はゞ知識自身の道德的善に從ふことである。例へば、解析幾何の如きものも單に便宜の爲に起つたものではなく、兩者の知識の根柢に於ける深い具體的統一の要求から起るものと考へねばならない。而して此の如き結合が具體的知識の發展として意味を有するには、代數は代數の立場に於て純化せられ、幾何は幾何の立場に於て純化せられねばならぬ。projective groups といふ如きものは、かゝる兩方面の知識の純化の結果として成立するのである。知識にはそれ〴〵の立場を認めねばならぬのであるが、

眞理は無限に達すべからざる內面的統一の理念の上に於いて成立するのである、眞理の理念があつて始めて知識の價値を認め得るのである、知識の體系から離れた知識は知識として無價値なものでなければならぬ。幾何は invariant groups に過ぎないとは數學者の屢々口にする所であるが、羣の成立にはその根柢に直觀なければなるまい。無論その直觀は我々が眼にて見るといふ意味に於ての直觀ではない。併し知識其者の目的は客觀的となることであつて、客觀的となると云ふのは綜合的統一に達することであるとするならば、幾何學が眞理として意義を有するには知識の目的より要求せられるものでなければならぬ、知識の理念の顯現でなければならぬ。純なる數の立場からはかゝる構成は單に人爲的と考へられるかも知れない。併し群の中に如何なる subgroups を有するかといふ如きことは、直觀の指導に待たねばなるまい、單なる抽象的一般よりしては特殊化の原理は來ない。かゝる結合は具體的統一の顯現に待たねばならぬ、それ自身に於て動的なる一般者の發展によらねばならぬ。此處に特別のアプリオリを有する「學としての幾何學」が成立つ理由があるではないかと思ふ。幾何學を單に人爲的と考へる人は此の如き內面的直觀を認めないからである。力學の如きものでも、ヘルツの試みた樣に、全く力といふ概念を除

いて時間、空間、質量といふ概念を基礎として力學を構成するとすれば、力學のアプリオリは失はれて、一見數學の應用に過ぎないと考へられるであらうが、力とは時間、空間、質量の概念の單なる結合ではあるまい。力學的關係といふ如きものゝ成立するのは數其者の概念より出づると考へることはできぬ。此處にもやはり一つの先驗的創造がなければならぬ、私は純粹意志の內面的體驗なくして力の概念は成立し得ないと思ふ。我々は力の關係を分析して數學的關係に歸することができるかも知らぬが、力とは單に數學的關係の人爲的結合ではない。或關係の綜合統一が先驗的なるか、單に人爲的なるかを分つのは、之によつて一つの客觀的世界が構成せられるか否やを知ることによつて明となる、或知識が單に應用に過ぎないか否やを檢するには、その結合が他律的なるか自律的なるかを知るによつて明にし得ると思ふ。その統一其者が生產的なる時、我々は之を單なる應用と見做すことはできぬ。目的と作用とが合一してそれ自身に於て無限なる一つの客觀的世界を構成するのである。右の如き意味に於て幾何學や力學はそれ自身のアプリオリを有し單なる應用ではないと考へるのである。

我々の知識の根元には、善の理念がある、目的的統一がある。知識が客觀的となる

といふことは此根元に向つて進むことである。古來學問の爲に努力せし幾多の學者の行爲が直に道德的意義を有すると考へられるのは、此意味でなければならぬ。模寫說の立場から云へば、知識の目的は知らうとするものゝ完全なる相に達することであらうが、與へられるものは求められたものであるといふ考へよりすれば、知識の目的は構成作用其者にあると考へることができる。知識の目的は知ること自身にあると考へることができる。而して此の如き主觀的活動其者が客觀的對象であり、此の如き客觀的對象が文化的實在であつて、眞の道德的行爲といふのはかゝる實在の構成以外にあり得ないであらう。如何に抽象的な知識であつても、知識成立の深い根柢に於て反省せられた時、卽ちアプリオリのアプリオリの立場からアプリオリ自身が反省せられた時、人格的意義がなければならぬ。知識の根柢には深い自覺的體驗がある。無限數の理解の如きものであつても、私は自覺の體驗なきものは之を知ることはできないと思ふ。眞の無限は外に向つて進むことではなく、深く內に入ることである。哲學の職務は此の如き意味に於て知識の根柢に於ける人格的意義を明にするのである、アプリオリのアプリオリの立場からアプリオリを反省するのである。此處に哲學の獨立の領分あり、知識統一の意義があるのである。哲學は

「善の理念」の上に立つて居る、哲學は理性其者の反省であり、知識自身の自覺である。知覺や感覺の根柢に人格的內容を見出すことによつて、それが哲學となるが如く、客觀的知識の根柢に人格的內容を見出すことによつて、それが藝術となるのである。知識は哲學となることによつて、人格其者と內面的に接觸することができる、否人格の一要素を成すのである。恰も音樂的感情が抒情詩に於て內容其者の美となるが如く、知識は哲學となることによつて、知識其者が善となるのである、是に於て形式と內容とが一致するのである。理性を離れて我々の人格はない、理性其者の自覺は我々の人格其者を動かさなければ已まないであらう。眞の道德的行爲といへば、人格其者の變革より貴いものはない。街頭に叫ぶ社會主義者は人に食と衣とを與へるかも知れない、併し人心を內から改造することはできぬ。知識はすべて實用より起るであらうが、すべての他の文化財の如く、知識が純化せられればせらるゝ程、人其者を變せないでは了らぬであらう。耕作や航海の必要から起つた天文學はケプラーをして神を稱へしむるに至つたのである。

それでは、眞と善とは直に同一であるか、知識と道德とは相衝突する場合はないか。知識の根柢に目的的統一を信じ善の理念を信ずる私は、多くの反對を豫期しつゝも

何處までも兩者の一致を主張したいと思ふ。兩者相背く樣に思はれるのは、その孰れかゞ抽象的一面に偏するによるのである。抽象的一面に傾くといふことは、知識はその目的から離れることゝなり、道德は自己の目的に反しその本質を破壞することゝなるのである。人其者の知識に於ては眞と善とは一致すべきであり、單なる自然科學的知識は直接に道德とは何等の關係もない。唯、自然科學的知識を以て直に人間を律せうとするとか、又單に學問の研究を唯一の目的として、之が爲に義務を怠り他を犧牲とするといふ如き場合に、學問と道德と相背くと考へられるのである。併し前者は知識の不完全に基づき、後者に於ては內容が衝突するのではなく、人生の他の要求を抑壓するのである、卽ち或一つの要求に偏することが人格其者の統一を破る時、それが惡と考へられるのである。我々が社會の義務を忘れ人間の愛を捨てゝ徒らに學問や藝術に專一なる時、縱しそれがそれ自身に價値あるものとするも、我々の行爲は道德上批難を免れ得ないのである。かゝる場合何故に我々は道德上批難を受けねばならぬのであるか。單にそれが多くの人の物質的要求の爲ならば、それ自身に價値あるものに從事することが、人として却つて尙ぶべき仕事であるかも知れない。社會奉仕や慈愛が學問や藝術にもまして道德的價値を有すると云ふに

は、此等の行爲其者が價値あるものでなければならぬ。併し我々は此處に復前に云つた矛盾に陷らねばならぬ。人の爲めにすることは人の生活を安固にし之が向上を謀ることに外なからう。而して人間の向上といへば學問藝術の如きものゝ外に求めることは出來ないであらう。所謂道德的行爲が此等の文化價値以上の價値を有するとは如何なることを意味するか。他の手段としてゞなく、それ自身に價値を有するものは、自己の客觀界を有するものでなければならぬ、創造的なものでなければならぬ、無內容なるものは他の手段となるの外はない。獨立なるものは、自己の中に關係を含み、無限に生產的でなければならぬ、價値卽實在的のものでなければならぬ。而して一つの價値が他の價値の上に位し、他の價値が之に從屬すると考へられるには、前者と後者とは目的的統一の上に立ち、前者は具體的全體として後者を包含するものでなければならぬ。道德的善が最高の價値として他の文化價値の上に位するには、義務の爲の義務とか愛の爲の愛とかいふ樣なものではなくして、他の價値の對象界を綜合統一する獨立の客觀界を有するものでなければならぬ。プラトーがフィレボスに於て云つて居る Sammelplatz des hochpoetischen homerischen Mischbecken の如きものでなければならぬ。肉欲にも名利にも人間のすべての欲望に戶を開いて、

而もその背後に何れの欲求にも分析することのできない具體的統一の內容が見出されなければならぬ。我々が感覺的經驗に於て合理的となるといふことは、感覺の權威を無視することではなく、此等の經驗の綜合統一の上に於て客觀的なる一つの世界を見出すにある如く、道德的行爲が合理的であるといふことは、禁欲論者の說の如く種々の欲望を否定することではなく、深く欲望の根柢に透徹して、そこに自由なる客觀的世界を見出すにあるのである。此故に道德は歷史的內容を離れてない、自然を唯一の實在と考へるならば、道德的行爲の意義はなくなるのである。カントが靈魂の不滅や神の存在を立てなければならなかつたのも道德を全然形式的に考へた故であると思ふ。我々の行爲の一々が、恰も Lady of Shalott の物語に於ての如く、「時」の梭によつて自然の具體的根元とも云ふべき歷史の機に織込まれるものとして、始めて嚴肅なる當爲の意義を有するのである。カントの立場からすれば、此の如き考は完全說と同じく道德の自律性に背くものとも考へられるであらう。併し物の完全は人に對して他律的であるかも知らぬが、我々の目的の內容、意志其者の內容は他律的である筈はない。形式的道德は却つて主觀的となるの外ないのである。我々の個人的人格が知情意の總和ではなく、却つて此等のものが一人格の表現である

が如く、一代の文化は一つの客觀的精神の表現でなければならぬ。眞も善も美も此處に基礎を有せねばならぬ。文化が成熟すればする程、此統一が明となる。ハインリッヒ・シュタインは希臘の殿堂は希臘の自然と生活とが與へた高き人生の根から生えた樣であると云つて居る。我々は單に生存する爲に生存するのではなく、我々は我々の隣人と共に、一つの文化の構成者として、互に人格的價値を認め、互に相敬し相愛するのである。道德的當爲も此見地より出て來るのである。私はフィヒテの愛國的行爲に對しては、固より無限の敬意を表するものではあるが、必ずしもエーナの街に於けるナポレオン軍の砲聲を聞きつゝ靜に「精神の現象學」を書きつゝあつたといふヘーゲルを非するものではない。如何なる行爲が眞に善なるかは歷史の批判に俟たねばならぬ。物理的知識の眞僞がプランクの云ふ如く物理的影像の世界の統一によつて試めさるゝならば行爲の善惡は意志の客觀的對象界たる歷史的實在の世界に於て試めされなければならぬ。道德の客觀性は之によつて立せられるのである。此故に道德の第一義は徒らに因襲に從つて行爲するにあるのではなく、文化的精神の深い洞察にあると考へざるを得ない。善意は文化的精神に對する謙遜にして一公平なる理解を條件とするのである。

論じ來つた如く、知識の根柢には目的的統一があり、知識はその具體的根元に還ることによつて、人格的內容に到達せねばならぬ。而して此の如き人格的立場に於ける知識自身の自覺が哲學であるとすれば、我々の知識は哲學に於て藝術や道德と結合せなければならぬ。藝術に於ては自然の描寫も單に外物を寫すのではなく、その本質を成すものは人格的內容であり、人間を對象する藝術に至つては、それが美であると共に眞であると云つた如く、純粹なる理論的科學者の仕事も外に於ける自然の模寫ではなくして、それ自身が人格的構成作用でなければならぬ。而してかゝる知識がそれ自身に於て自覺した時、それが哲學として情意の要素を帶びて來なければならぬのである。知識はその極に於て行爲に接せなければならぬ。而してかゝる方向は知識が他律的となるのではなく自己自身の目的に向ふことである、卽ち知識が自己の內容を特殊化して行くのである、一般から特殊に到るのである。知識は之によつて自己の客觀性を得るのである。知識は特殊となるに從つて動かし難い客觀性を得るのである、事實感の根據は之にあるのである。眞理と生命と結合することによつて何の得る所もないと云ひ得るであらう、代數が幾何と結合せられると否とは代數の眞理に何の關係もない、力學と實驗的事實との間に於いてすら斯く云ひ

得るでもあらう。併し私はカントが內容なき思想は空虛であると云つた如く、我々の思想が客觀的眞理となるには、直覺と結合せねばならぬ。單なる抽象的眞理は超越的主觀の夢にすぎないのである。眞理は何人も認めねばならぬものではあるが、普遍的たることを要しない。知識が一般的妥當性を得るといふことは深く自己の中に入つて超越的意志と結合することである。具體的眞理は却つて特殊化統一の方向に求めねばならぬ。如何なる知識も最も深い意味に於ける生命の統一に於てのみ、眞の客觀性を得ることができるのである。藝術が哲學を要求する如く、哲學も亦藝術を要求せねばならぬ。具體的精神は哲學に於てその知識を有すると共に、藝術に於て情を有し、道德に於て意を有するのである。哲學が深い生命の統一に入り、之を表現することによつて、恰も力學が經驗的事實と結合することによつて得る如き或物を得ると思ふ。この或物こそ、藝術としてその表現を求め、道德としてその實現を求めるものである。知識は具體化せられることによつて、單にその例を見出すのではなく、具體化の方向に於てのみその新なる發展をなし得るのである。直覺なくして知識の發展はあり得ない。我々の行爲の統一たる道德が文化の具體的統一であり特殊化の形式であるとすれば、藝術も哲學も此立場に於て結合し統一せられ、

此立場に於て無限に新なる內容を得來るのである。道德的に純なる性格のみ、少くも道德的に純なる時のみ、哲學や藝術に於て創造的であり、眞に新なる生命の內容を捉へることができるのである。義務の爲に義務を行へと云ひ、汝の行爲の格率が一般的法則となるが如く行へと云ふも、かゝる行爲の立場に純なることを求むるの意味でなければならぬ。

私は前に音樂の如きは單に感覺的と考へられるが、藝術に於ても抒情詩の如きものは既に思想の內容が己自身を維持しつゝ、而も藝術的たることを失はない、特に戲曲の如きものに至つては、人生問題其者が藝術の內容となることができると云つた。音樂や繪畫に於て思想の內容をその儘の形に於て混入するは、此等の藝術其者を破壞するものであらう。マックス・クリンゲルの云ふ如く、畫家の理念は身體の位置に適する形の發展、空間との關係、色の配合等であつて、それがエンディミオンであらうがペータであらうが問ふ所でない。抒情詩の如きものでも、詩の美と內容の眞僞とは混同すべきではない。併し感覺といふのは普通に考へられる如く、爾反思惟的のものではない、單に非合理的な所與ではない。心理學者の所謂感覺の如きものならば、そ

れから何等の藝術も出て來やうはない。感覺が「知覺の豫料」の原理に當嵌つて知識の材料となり得る如く、それが更に深い「意志の豫料」の原理に當嵌つて始めてそれが藝術の材料となると云ふことができる。而して斯く自由我の對象となるといふことは、音や色や形の感覺の更に深い具體的根元に還るといふことでなければならぬ、自我の根柢に透徹することでなければならぬ。直覺的と考へられる藝術の內容に就て右の如く考へ得ると共に、概念的知識の根柢に於ても人格的內容を認めねばならぬ。上に云つた如く哲學は知識の自覺である、哲學に於て概念的知識は藝術的となるといふことができる。無論感覺的藝術に於ては知的內容は何等の權威も有たぬ、知識の客觀性は問題ではない。之に反し知的內容の客觀性を無視した哲學は哲學といふことはできぬ。併し音樂よりも抒情詩、抒情詩よりも戲曲と、知的內容其者が直に藝術的となると考へることができる。啻に知的內容其者が藝術的となるのみならず、人間其物を對象とする藝術に於ては眞が卽ち美であると云ひ得るでもあらう。私は右の如き藝術的眞の極致に於て哲學的眞に接するとも考へるのである。無論斯く眞と美とを同樣に考へるのは、多くの異論のあることであらう。併し僞にして美なるものはない。不純なる目的から成れるもの、技巧の末に走れるものは、如

何に巧妙であつても、我々は之に藝術的價値を認めることはできぬ。眞に美なるものは、その根柢に於て何等かの意味に於て動かすべからざる客觀的或物に撞着するものでなければならぬ。藝術の寫す所は事實的眞でないことは云ふまでもない。藝術は元來事實的眞理を寫すを目的として居るものではない。既に事實的眞理を目的とせないで之を寫さないと云ふのは僞ではない、僞を自白した僞は僞ではない。之に反し神話や童話の中にも多くの深い人情を含んで居る。我々は此等のものゝ中から歴史の中からよりも永遠なる人世の眞理を見出すことができるのである。無論かゝる意味に於て眞と感ぜられるものは事實的眞でもなければ、又必ず從はねばならぬ因果的法則でもなからう。併し我々は其中に所謂眞理に於て感ずる如き客觀的な或物を感ぜざるを得ないのである。藝術に於ては表現其者が眞理である、技術其者が眞理でなければならぬ。而して表現手段となる材料が感覺的なものより表象的なものとなり、概念的なものとなるに從つて、藝術的內容と知的內容とが相接近して來る。カントの意識一般といふ如きもの單なる綜合的意識ではなくして創造作用でなければならぬ。超越的自己の本質はフィヒテの云ふ如き超越的意志でなければならぬ、知識の前に行爲がなければならぬ。ヒルデブラントはその有名な

る「形の問題」に於て、我々の純粹視覺は視覺的因子と觸覺的因子との結合であつて、常人に於ては此要素間の關係が明晰を缺いて居るが、之を眞に能く結合するのが藝術家の職務である、而して彫刻家は觸覺的要素を材料として之を視覺的に統一し、畫家は之に反し視覺的要素を基として之に觸覺的要素を加へると云つて居る。畫家や彫刻家の對象とする空間とは我々が概念的に考へた空間と同一ではない。フィードレルが純粹視覺の立場に於て無限なる展望が開かれると云ふ如く、此の如き空間はフィヒテの事行の如き無限なる行爲でなければならぬ。作用が對象の束縛を脱して自由となり創造的となるのが、我々が人格的に自由となることであるとするならば、此の如き行爲も道德的行爲の一つといふことができるであらう。ヒルデブラントは自然が與へる無限の資料の中から如何なる因子を擇ぶかは、藝術家の個性によるとしても、藝術家はいつでも視覺的要素と觸覺的要素との間に存する法則に從はねばならぬと云つて居るが、藝術家の目的とする所は單にかゝる客觀的關係ではなくして、物の形にあるのである、而してかくいふ物の形とは單に一般的な物の形ではなくして、個性を有つた物の形でなければならぬ、卽ち一つの個性的實在でなければならぬ。此個性は之を物の個性と云ひ得ると共に又藝術家の個性とも云ひ得るので

ある。藝術的作品を藝術家の個性の表現として見るのは此意味でなければならぬ。色や形に種々の聯想が加り來るといふのも、此立場に於てゞなければならぬ。薔薇の香を嗅いで舊時の記憶を想起するのではなく、薔薇の香の中に舊時の記憶を嗅ぐのである。藝術の內容が感覺的內容と離すことのできない關係を有つて居ると考へられるのは之によるのである。畫家や彫刻家の眞理といふのは純粹視覺の世界に於ける無限なる個性的眞理でなければならぬ。而して此の如き事實的眞理の成立するには、意識一般の立場に準ふべき純粹視覺一般の立場とも云ふべきものを考へねばならぬ。藝術的作品は此立場の上に立つ實在として、すべてが一つの體系に結合せられ、一つの世界を構成するのである。藝術史は此世界の發展を顯すものでなければならぬ。此の如き「時」の概念を含まないものを事實の世界とするのは不當と云ふかも知らぬが、「時」とは具體的一般者の內面的發展の形式に過ぎない、所謂事實の世界の基たる「時」もかゝる形式の一般的なるものと考へ得るであらう。我々が或藝術の作品に對し美と感ずる時、單に之に對し快感を有つのではなく、その中に客觀的生命を感ずるのである、純粹視覺の世界に於ける眞理を見出すのである。此意味に於て美は卽ち眞である、所謂意識一般の立場に於て歷史的眞理を見出すと同樣で

ある。非概念的なるものを眞理といへば種々の疑問が起るであらうが、眞理は單に概念的關係によつて成立するものではなく、概念的眞理の根柢にはいつでも創造的直觀がなければならぬ。この總合的直觀の性質によつて種々なる意味の眞理が成立し得ると考へることができる。無論歷史に於て美なるが故に眞であるといふことはできない、又眞なるものが直に美とも云はれない。併し我々が歷史的眞理の背後に宇宙的生命を感ずる時、我々は之に對し一種の美感を有つことができる、それが所謂宗敎的感情である。歷史的眞理が宗敎的內容に對する關係は恰もヒルデブラントの所謂視覺と觸覺との兩因子間の關係と藝術的內容との關係の如きものと考へることができると思ふ。宗敎的感情によつて歷史的事實を曲げてはならぬのは、畫家や彫刻家が感情によつて物の形を曲げてはならぬと同樣である。我々はあるが儘に眞理を見なければならぬ。一切の虛僞は美を破壞し神聖を汚すものである。何等の豫想なく、物の形をありの儘に見ることが美なるが如く、歷史的事實をありの儘に見る所に宗敎的感情がある。眞正なる宗敎的感情といふのは絕對に謙遜なる心持である、全然自己を擲つた心持である。知識的自己を棄てるのみならず、情意的自己をも棄てねばならぬ。自己の全人格を放擲した所に、神聖なる宗敎的感情が現

れ來るのである。眞理を知る時、我々は自己をすてゝ眞理其者に從はねばならぬ、藝術的に物を見るといふことは自己を物其者の中に沒することでなければならぬ。共に自己をすてゝ客觀其者に從ふのであるが、學問は情意を統一する能はざるが故に主觀的であり、藝術は知識を統一する能はざるが故に主觀的である。いづれの意味に於ても客觀的なる時、そこに宗教的感情を生ずるのである。藝術的感情と宗教的感情とは往々同一視せられるのであるが、宗教の對象は實在でなければならぬ、宗教的感情の中には實在感を含まねばならぬ。宗教は單なる鑑賞や享樂ではなくして深い眞理の憧憬と眞摯なる實行とを含まなければならぬ。宗教は屢反理性的と考へられるが、正法に不思議なし、反理性的なる宗教は迷信に過ぎない。多くの宗教家にありがちな眞理の探求を輕んずることすら、既に宗教的謙遜の情に背くと思はれるのである。

チーヘンが太陽の表象は輝かないと云つた如く、感覺と表象と、表象と概念との間には越ゆべからざる相違が有と考へられるのは一面の眞理であるが、全き眞理ではない。藝術の對象としての空間と幾何學の對象とする空間とは狼星と犬との如き相違はあるかも知らぬが、私はその本質に於て何等の關係もないものではないと考

へる。右の如き考は感覺、表象、思惟の作用が根本的に異なつて居るといふ前提の結論として起るのである。ブレンタノの考の樣に作用の性質はその內在的對象の性質に基くと考へるならば、我々は赤を見、赤を想起し、空間を見、空間を考へるといふ時、作用其者の間に何等かの內面的關係がなければならぬ。自然現象に於ては、かゝる意味の連續は實在的には何の意義も有せないかも知らぬ。併し意味卽實在たる精神現象に於ては、同一なる語によつて表される意味の連續には實在的連續の意義があると考へることができる。かゝる場合、言語は思想の直接なる表現として、單に考へられた心理作用以上の意義を有つて居る。普通には、時間に於て生滅する我々の精神現象が身體の空間的統一によつて結合せられると考へられるのであるが、私は心理的に分たれる種々なる作用の統一は此等を超越する表現的統一によつて結合せられるのであると思ふ。意味とか實在とかが客觀的であるといふのは種々なる作用の變化を超越するといふことである。我々が赤を感覺し表象し、想起し、思惟する時、客觀に於て一つに結合して居なければならぬ。赤の表象と赤の概念とは異なると云ひ得るであらう。併しかゝる考に固着すれば、同じ感覺であつても時々刻々に移り行く作用によつて變ずると考へねばなるまい。斯くては遂に客觀的對象なる

ものゝ成立し樣はない。客觀的對象は作用によつて變ずると考へられると共に、赤は赤としての自己同一性を有せねばならぬ。作用によつて變ぜざる對象が、或る一つの作用の對象として考へられた時、他の作用からは「單に客觀的」と考へられる。我々が普通に客觀的と考へるものは單なる思惟の對象界であつて、之に反し作用の變化を通じて連續する客觀的對象界は、作用の作用の對象界として表現の世界となるのである。是故に此立場に於て我々は感覺的なるものの中に概念的なるものを見出し、概念的なるものゝ中に感覺的なるものを見出すのである、意味と實在とが結合するのである。我々は或物を見、其物を想起し、其物を考へると云ひ得るならば、我々はそこに作用の作用の對象界、表現作用の對象界を認めねばならぬであらう。言語から藝術に至るまで、皆此立場に於て成立するのである。藝術は此方面に於て感覺の本質たる理想的なるものに到るのである。感覺が「知覺の豫料」の原理に當嵌まるといふのも此立場に於てゞなければならぬ。

感覺の世界の本質に入つて行くといふのは思想の世界と別の世界に入つて行くことではない。音樂家が音に於て自由なる時、彼は音樂的思想の世界に入り込むのである、單なる音ではなくして、無限なる記憶を含み無限なる思想を含む世界に入り

込むのである。モツァルトやベートヴェンに於て音樂的精神が詩から獨立したと云はれるが、運命との奮鬪を歌へるベートヴェンの音樂の如きは深い哲學的思想と英雄的精神とに富むものならでは能くし得ない所であらう。無論音樂的思想などいふ語其者すら或一部の人々の反感を招くことであらう。併し藝術的に深く進むといふことは無意識となることではない。眞に感覺を知るものは感覺に捉はれた人ではなくして、之を脱し得る人である、自由に感覺を用ゐ得る人である、自由我の立場に立つ人でなければならぬ、一つの物を感じ想起し考へる立場の上に立つ人でなければならぬ。此立場に入ることによつて感覺が無限の記憶や思想を含み得るのである。繪畫についてもマックス・リーベルマンの如きは善き畫は唯善く考へられた畫である、如何に形が正しく、色が美しくとも、内面的なるものが缺けて居れば、唯描かれた布に過ぎないと云ひ、Erst die Phantasie kann die Leinwand beleben, sie muss dem Maler die Hand führen, sie mu s ihm im wahren Sinne des Worts bei in die Fingerspitzen rollen (Max Liebermann, Die Phantasie in der Malerei. s. 21) と云つて居る。無論種々なる藝術の根柢に含まれたる本質と所謂思想とを直に同一視すべからざるは云ふまでもない。レムブラントは弟子の如何にして描くべきかといふ問に對して、先づピンゼルを取つて試みよと

云つたといふ樣に、畫家の思想はピンゼルを離れてない。藝術家は彼等のテクニックによつて考へるのである。そこに一々の藝術的思想の他によつて表はすことのできない特徵があると共に、その局限性も亦此處にあるのである。言語に於ての樣に表現手段が自由となればなる程、深く大きな思想の世界を表現することができるのである。ベルグソンの哲學に於て一つの生物的生命の流が種々の形を取ると考へられる如く、我々の精神的生命も種々なる形を取るのである。而して種々なる生命がそれぞれの價値を有すると共に、ジラフの頸骨の數も鯨の頸骨の數も同一と云はれる如く、何處までも一つの生命の流たるを失はない。建築や音樂に比して、詩は思想として自由なるが故に、藝術として勝れたものであるといふのではないが、精神的生命全體の具體的統一たる文化生活の上に於て、自らそれぞれの異なつた意義と、定められた位置とのあることを認めざるを得ない。我々の人格が單に種々なる作用の結合でない限り、我々の生命が單なる變化でない限り、一つの中軸と方向とを有すると考へざるを得ない。

我々の自我は或物を見、或物を聞き、之を想起し、之を思惟し、之を欲し、之を動かすものである。此の如き自我に對する對象は見られ、聞かれ、想起せられるとゝもに、思惟

の對象となり、行爲の對象となるものでなければならぬ。斯く種々なる對象界を統一するものこそ、我々に與へられた最も具體的な統一である。我々の見るもの、聞くものが眞の實在ではない、眞の實在は思惟の對象でなければならぬ。否、單に思惟せられたものも亦實在ではない、眞の實在は經驗內容と結合したものでなければならぬ。併し所謂知識の對象界は未だ眞に與へられた具體的實在ではない、一般的である限り、抽象的である限り、如何にとも考へ得る世界である。動かすことのできない唯一の具體的なる實在は現實の意志によつて定まつて來る。而もその意志は單に超越的意志といふ如きものでなくして、內容を有つた特殊の意志でなければならぬ。我々に取つて動かすべからざるものは現實の意志である。何となれば現實の意志は卽ち自己なるが故である。現實の意志の對象たるもの、否現實の意志其者がすべての對象界に出入して而も連續的なる卽ち種々の對象界を統一する具體的實在である。現實の意志に於て主客合一し、我は行爲の立場の上に立つのである。私が絕對意志の立場といふのも之に外ならないのである。此の如き現實的意志の對象たる眞實在に入つて行くことが藝術的活動である。此實在に入るには全身を打して一團の力とならねばならぬ、全身が一つの活動とならねばならぬ。眞の現實といふ

のは空間時間の形式によつて限定せられた一點ではなく、却つて意識一般を內に射影したものである、經驗其者の中に無限なる理想の進行を藏したものである。特殊的統一、個性的統一といふのは統一を無限なる行先に於て見るのである。畫家は筆を取らずして徒らに考ふべきではない、筆を取つてカンバスに向ふ時、如何に描くべきかゞ明になつて來る、無限の行先が開けて來る。而して私は此途を進み行くことによつて道德的世界に到達すると考へるのである。道德は抽象的な一般の法則より出立すべきものではない、藝術と同じく現在の事實より出立するのである。見られ、聞かれ、考へられ、欲せられる全實在の中に深く入つて行くのである。道德は藝術や學問や種々の欲求と離れたものではない、此等のものの根柢に無限に深く進み行くことである。所謂道德的社會現象といふのも、此の如き道筋の上に現れ來るのである。現在の自己よりしては現在の自己の要求を直に滿足すべきであらう。併し過現未を統一する自己の立場からしては、我々は異なれる要求を有たねばならぬ。知識の方に於て感じられるものから想起せられるものへ、想起せられるものから考へられるものへ入り込む如く、衝動の方面に於ても、かゝる實在の方向に進む時、所謂道德的社會現象が現れ來るのである。すべてそれ自身に獨立なる實在は一方に於

て統一たると共に、一方に於て無限の分裂、無限の發展である、自己自身の中に無限の矛盾を藏して居るのである、否矛盾其者が統一となるのである。具體的實在に於ける統一の方向が藝術的直觀となり、その分化發展の方向が道德的當爲となる。藝術的直觀も道德的意志も共に現實より出立するのであるが、道德的意志はかゝる方向に於てその最終點に達しやうとする無限の努力たる點に於て藝術的直觀と相反して居る。而して道德の最終點に於ける統一は最早藝術ではなくして宗敎でなければならぬ。宗敎は知識を超越して而も之を內に含み、道德を超越して而も之を內に含む。是故に宗敎は一面に於て藝術に似通ふと共に道德の如く何處までも嚴肅であり、實踐的である。(完)